

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03239

研究課題名(和文) 精神医療と宗教の連携による「地域ケア」の創出についての人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Studies of "Community Care" by Collaborating with Mental Medicine and Religion

研究代表者

浮ヶ谷 幸代 (Ukigaya, Sachiyo)

相模女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40550835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、精神医療と宗教との連携の在り方と地域ケアの創出について、エスのグラフィックなアプローチに基づいて調査研究を行った。北海道浦河町の精神医療を専門とする浦河ひがし町診療所とえりも町の法光寺住職との連携による「カフェデモンクえりも」の活動に注目した。成果として3点指摘できる。参加者が多種多様であること(えりも町と浦河町の宗教者、医療福祉の専門家、ひきこもりや精神障がい当事者、ボランティア、実習生、研究者など)、「プログラムがない」ことが参加者に緊張緩和と安心を与え、居場所となっていること、ひきこもりや精神障がいの当事者が自己変容していく場になっていること、である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ひきこもりや精神障がいについて教育社会学や臨床心理学の分野での研究では、専門家にとっての問題解決型アプローチや専門家のスキル向上を目指す方法が模索されてきた。それに対して本研究の学術的意義は、エスノグラフィックなアプローチによる当事者にとっての居場所づくりや当事者活動に着目し、当事者主体の重要性を指摘したことである。社会的意義は2つである。地域ケアに関して、宗教を地域の社会資源とみなし、医療と宗教との協働という視点を提供したことである。この視点は他の地域への汎用性がある。2つ目は、障がいや病気の有無や、異世代によってケアの対象を分割せずに、地域全体を視座に入れる視点を提示したことである。

研究成果の概要(英文)：I researched on caring process of "Cafe de Monk Erimo" through an ethnographic approach. It originates from "Cafe de Monk", which is a mobile cafe, is founded by Mr. Taiou Kaneta, who is a priest of Buddhist temple in Miyagi prefecture, after the Great Earthquake of East Japan in 2011. Urakawa Higashi-machi Mental Clinic in Hokkaido has collaborated with a Buddhist Temple at Erimo Town on "Cafe de Monk Erimo" since 2015. I focused the process how they go hand in hand.

As the result, I indicate 3 points. The first point is that "Cafe de Monk Erimo" has had a variety of participants: monks, a pastor, public nurses, volunteers, and young persons with schizophrenia and social withdrawal in Erimo Town: a doctor, nurses, social workers, and schizophrenics in Urakawa Town. The second point is that it is a place with no program, resulted in relaxed and safe for participants. The Third point is that participating in "Cafe de Monk Erimo" activates them self-transformation.

研究分野：文化人類学

キーワード：精神医療 宗教 地域ケア 居場所 多世代共生 地域文化 ひきこもり 当事者活動

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

北海道浦河町の精神医療を専門とするクリニック、浦河ひがし町診療所（以下、診療所）が、精神医療機関不在のえりも町でひきこもりや精神障がいを抱えている人たちへの支援を模索している中、東日本大震災の被災地石巻市で宗教者によって開催されていた〈カフェデモンクえりも〉の活動をえりも町で応用するという発想を得た。報告者は診療所のスタッフが抱える課題を耳にし、高田大志（研究協力者）スタッフとともに〈カフェデモンク〉の主催者、宮城県栗原市の通大寺の金田諦應住職を訪ね、えりも町の医療状況と社会的問題について相談し、その場で法光寺の佐野俊也住職（研究協力者）からの協力を得て、えりも町での〈カフェデモンク〉の開催の段取りをつけることができた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、精神医療と宗教とがいかに連携できるか、そしていかに地域ケアを創出できるか、日本のローカルな地域を例に、その連携の可能性を問うものである。現代の日本社会では、医療と宗教とは相いれない領域であり、科学に基盤を置いた生者へのケアと、宗教に基盤を置いた死者へのケアとは互いに棲み分けて認識されている。そうした社会的背景の中、地域で暮らす人々の生活の場から生み出される課題とそれに取り組む医療・福祉の専門職と宗教者との協働性に着目する。他方、近年、超高齢者社会を見据えて、病院医療から在宅医療へという政策転換がうたわれている。在宅医療を展開する場である地域で住民主体による地域ケアがいかに展開していくか、その創出のプロセスを明らかにすることを目指している。

3. 研究の方法

えりも町でのフィールドワークを中心に、研究者自身が現地の当事者の活動に参加しながら、当事者に巻き込まれつつ、ときには当事者を巻き込みつつ、地域ケアの創出について明らかにするために、エスノグラフィックな手法を採用している。これまで、人類学のフィールドワークでは、研究者は現地の生活になるべく近いところで調査し、フィールドの人たちの問題に当事者の一人として巻き込まれ、研究者であるよりも「一人の人として」フィールドにかかわることにより、現地の人たちの考え方や行動について明らかにすることが求められてきた（関根 2011；竹沢 2018）。

しかし、報告者はさらに一步踏み込み、ときには研究者自身のアイデアを提案し、フィールドの人たちは報告者を地域を変えていくキーパーソンとして位置づけた。それは、研究者の態度（構え）として、研究者とフィールドの調査対象者とを分けて役割関係を固定するのではなく、研究者はフィールドの人とともに悩み、考え、学び、そしてともに喜び、楽しむことを大事にし、一つの目的に向かってともに歩む者であり続けるということを意味している（Ingold 2018；インゴルド 2020(2018)）。

4. 研究成果

（1）〈カフェデモンクえりも〉の活動

2015年8月から月一回開催されている〈カフェデモンクえりも〉（以後、カフェともいう）に可能な限り参加し、調査を進めてきた。その成果は5の①の論文にまとめている。

ここでは、得られた知見として3点あげておく。1つ目は、参加者の多様性である。宗教者（仏教、キリスト教）だけでなく、えりも町役場の保健師（障がい福祉課、高齢者福祉課、児童福祉課）ひがし町診療所のスタッフ（医師、看護師、ソーシャルワーカー）や精神障がいの当事者（デイケアのメンバー）、当事者の親、社会福祉法人〈浦河べてるの家〉（以後、〈べてる〉）のスタッフとメンバー、ピアサポーター、そしてえりも町のボランティア女性、一時的な見学者、ジャーナリスト、研究者、実習生などである。なかでも特徴的なのは、司会進行役は、診療所の男性メンバーのYさん、Tさん、Hさん、Mさんである。金田住職が始めた〈カフェデモンク〉は、現在、全国各地域で病院や寺院など10か所以上の場所で開催されている。いずれにしても、医療専門職や宗教者が聞き手になり、そこに集まってきた患者や一般の人たちが話し手という役割関係にあるのが一般的である。それに対して〈カフェデモンクえりも〉では、障がいの当事者が進行を担当しているところが特徴の一つである。

2点目は、毎回のカフェではプログラムを用意していないところである。参加者へのインタビューから、「自然発生的で、行かないと何をするかわからないということが魅力的」（ソーシャルワーカー）、「これから熟成されていくところ、医療・福祉とは関係なくやっていて、できあがっていないところがおもしろい」（看護師）、「テーマもない、話さなくてもいい、自由気ままにふるまえるところがいい」（ピアサポーター）、「デイケアのようなプログラムがない、〈べてる〉のような仕事もない、病院のように治療を目指していない、デイにつながるとか、外来につながるとか、そういう下心がない」（当事者スタッフ）という声があった（浮ヶ谷 2018）。〈カフェデモンクえりも〉では、目的はあいまいで、予測不能なことが起こる。参加者の属性は問わないし、出入り自由である（オルデンバーグ 2013）。だからこそ、公的機関が用意する居場所と異なり、ひきこもりや精神障がいの当事者にとって「居場所」となり得るのである。

3点目、当事者メンバーが自己変容していく場所になったことである。10年間家族とも口をきいたことのない30代の女性が、当初は母親との同時参加が前提であったが、参加するたびに言葉を獲得していき、3年後には診療所のデイケアに単独で参加するまでになる。他のメンバ

一とのコミュニケーションをとるようになった。また、10代の引きこもりの青年は、当初、相性のいい診療所のソーシャルワーカーと同行することが必須だったが、2年くらいすると一人参加が可能となり、現在はコンビニでのバイトもするようになった。診療所や〈浦河べてるの家〉の精神障がい当事者が参加し、いろいろな人と交流を行っている姿は、えりも町の当事者にとって良い影響を与えたのである。

(2) カフェデモンクえりも in 厚真

2018年9月6日に北海道胆振東部地震が起こり、〈カフェデモンクえりも〉のメンバーが、被災地の中心地域、厚真町で〈カフェデモンクえりも〉の活動をやりたいということで、〈カフェデモンクえりも〉in厚真を同月26日に開催した。特に、〈カフェデモンクえりも〉の司会進行を務めるYさんとTさんは、会場に行くのと地元の参加者たちに積極的に声かけをしていた。メンバーはこのカフェでの役割を自分の病気体験と結びつけて参加していた。メンバーのTさんは、突然家や家族を亡くした被災者の喪失体験を、30年前に精神障がいを発症した自分自身の喪失体験と重ねて「自分でもなにかできないか」という思いで参加しているという。えりも町で始まった〈カフェデモンクえりも〉の活動は、北海道地震を契機として〈カフェデモンクえりも〉in厚真という活動に展開していった。それだけでなく、診療所のメンバーにとって自己の可能性が拓かれ、存在意義を見出す場所になった。このことは5の⑤の論文にまとめている。

(3) 地域デザインミーティング

「居場所」づくりとしての〈カフェデモンクえりも〉の活動が軌道に乗ると、診療所のスタッフは、えりも町に高齢者のための地域密着型施設、小規模多機能ホームを開設することに取り掛かる。高田ソーシャルワーカーと報告者は「住み慣れた場所でいつまでもAging in Place」を掲げ、在宅での看取りが消失した地域で病院死とは異なる、在宅死というもう一つの選択を可能にする世論形成に取り組んだ。まずは〈カフェデモンクえりも〉の主催者の一人、佐野俊也住職を代表として「シリーズ勉強会」を2016年9月から4回にわたって開催した。当初はえりも町役場の保健師を対象に開催したが、次第に関心をもつ町民に声をかけ、4回目の最終回にはシンポジウムを企画し、50人の町民が集まった。

勉強会と並行して、診療所のスタッフは高齢者向けの小規模多機能ホームの開設場所を探していたが、えりも町の本町に見つけることができた。そこで、高田氏は高齢者ケアに関心のある人や地域住民に声をかけて、2017年9月、10月、12月、2018年3月の4回にわたり「地域デザインミーティング」を企画した。このミーティングには3つのユニークな特徴がある。①リフォームを手掛ける設計士が毎回出席していることである。設計士はその都度設計図を持参し、参加者からの意見を可能な限りで反映し、修正していく。②施設の目的から言えば、参加者は高齢者が対象となるが、高田氏は初めから、子育て中の母親や、認知症の高齢者、不登校の中学生など、多世代の人に声をかけていたことである。③ミーティングは、引き渡しされていない高齢者夫婦の自宅で行われたことである。つまり、売り主がまだ住んでいるときにミーティングを開催している。売り主の高齢者夫婦の人生の物語を活かした形で小規模多機能ホームを設立したいという買い主の意思の表れである。

引用文献

- Ingold, Tim 2018 *Anthropology and/as Education*, Routledge.
- インゴルド, ティム 2020 『人類学とはな何か』(奥野克己・宮崎幸子訳) 亜紀書房。(2018 *Anthropology: Why It Matters*, Polity Press.)
- オルデンバーグ, レイ 2013 『サードプレイス: コミュニティの核となる「とびきり居心地の良い場所」』 忠平美幸訳, みすず書房.
- 関根康正 2011 「むすび 人類学系フィールドワークの原液」『フィールドワーカーズ・ハンドブック』(日本文化人類学会監修) 世界思想社.
- 竹沢正一郎 2018 「人類学を開く: 『文化を書く』から『サークル村』へ」『文化人類学』vol. 83-2, pp. 145-165.

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 浮ヶ谷幸代 2018a 「『居場所を創る』: 精神医療と宗教との連携による〈カフェデモンク
えりも〉の活動を中心に」『社会学論叢』第 192 号, pp.1-24.
- ② 浮ヶ谷幸代 2018b 「生を刻む みる・きく・たたく・かわす: 北海道浦河ひがし町診療所
の「音楽の時間」から」『Contact zone』10:186-209. (査読有)
- ③ 浮ヶ谷幸代 2019a 「日本における『看取り文化』を構想する: 死と看取りをめぐるケア、
選択、場所性をてがかりに」『文化人類学』84 巻, 第 3 号, pp. 281-294. (査読有)
- ④ 浮ヶ谷幸代 2019b 「ルームシェアで最期を迎える: 神奈川県藤沢市 UR 住宅の小規模多機能
ホーム〈ぐるんとびー〉の取り組みから」『文化人類学』84 巻, 第 3 号, pp. 314-330. (査読
有)
- ⑤ 浮ヶ谷幸代 2019c 「文化人類学が見た対話の力」『パペットセラピー』第 13 巻, 第 1 号,
pp. 4-11.

[学会発表] (計 5 件)

- ① 日本文化人類学会第 50 回研究大会 (個人発表) 2016 年 5 月 29 日 (南山大学名古屋キャン
パス)
「精神医療と宗教との連携による地域ケアの創出: 〈カフェデモンクえりも〉の活動から」
- ② 日本文化人類学会第 51 回研究大会 (個人発表) 2017 年 5 月 27 日 (神戸大学)
「地域をみつける、地域をつくる」
- ③ 日本文化人類学会第 52 回研究大会 (分科会代表と分担発表) 2018 年 6 月 2 日 (弘前大学)
趣旨説明「現代日本における『死』と『看取り文化』を考える」
分担発表「ルームシェアで最期を迎える: 神奈川県藤沢市 UR 賃貸住宅での小規模多機能ホ
ーム〈ぐるんとびー〉の取り組みから」
- ④ 日本保健医療社会学会第 44 回 (RTD 座長と分担発表) 2018 年 5 月 20 日 (北海道星槎大学)
RTD 趣旨説明「全体的生を支える地域ケアを構想する: 有縁/無縁を越えて多世代住民と多
職種専門家との連携を視座に」
分担発表「住民主体の地域ケアを構築する: 北海道えりも町の『地域デザインミーティング』
を中心に」
- ⑤ 日本文化人類学会第 53 回研究大会 (分科会代表と個人発表) 2019 年 6 月 1 日 (東北大学川
内キャンパス)
趣旨説明「コミュニティ (地域) による看取りの力」
分担発表「『大きな移住』と『小さな移住』: 日本版 CCRC と小規模多機能ホーム〈ぐるんと
びー〉との比較から」

[図書] (計 0 件)

無し

[産業財産権]

無し

○出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

無し

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

無し

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：高田大志、佐野俊也

ローマ字氏名：TAKADA Taishi, SANO Shunya

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 浮ヶ谷幸代	4. 巻 84巻、第3号
2. 論文標題 日本における「看取り文化」を構想する - - 死と看取りをめぐるケア、選択、場所性をてがかりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 281-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浮ヶ谷幸代	4. 巻 84巻、第3号
2. 論文標題 ルームシェアで最期を迎える - - 神奈川県藤沢市UR住宅の小規模多機能ホーム「ぐるんとびー」の取組から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 314-330
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浮ヶ谷幸代	4. 巻 第13巻、第1号
2. 論文標題 文化人類学者が見た対話の力	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 パペットセラピー	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浮ヶ谷幸代	4. 巻 第192号
2. 論文標題 「居場所」を創る - - 精神医療と宗教との連携による<カフェデモンクえりも>の活動を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会学論叢（日本大学社会学会）	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浮ヶ谷幸代	4. 巻 第16号
2. 論文標題 中学生の育ちを支える「学校図書館」について考える - - 北海道えりも町立中学・高校と神奈川県田奈高校の事例を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間社会研究（相模女子大学人間社会学部）	6. 最初と最後の頁 9-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浮ヶ谷幸代	4. 巻 10巻
2. 論文標題 生を刻む みる・きく・たたく・かわす - - 北海道浦河ひがし町診療所の「音楽の時間」から - -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 コンタクトゾーン	6. 最初と最後の頁 186-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 浮ヶ谷幸代
2. 発表標題 分科会：コミュニティ（地域）による看取りの力
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浮ヶ谷幸代
2. 発表標題 現代日本における「死」と「看取り文化」を考える
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 浮ヶ谷幸代
2. 発表標題 全体的生を支える地域ケアを構想する - - 有縁/無縁を超えて多世代住民と多職種専門家との連携を視座に
3. 学会等名 日本保健医療社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 浮ヶ谷幸代
2. 発表標題 地域を見つける、地域を創る - - 小規模多機能ホームの取り組みから - -
3. 学会等名 日本文化人類学会第51回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 浮ヶ谷幸代
2. 発表標題 精神医療と宗教との連携による地域ケアの創出 - - <カフェデモンク・えりも>の活動から
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 浮ヶ谷幸代
2. 発表標題 見る・聴く・たたく・交わす - - 北海道浦河ひがし町診療所ナイトケア「音楽の時間」から - -
3. 学会等名 澤野美智子（立命館大学）・田中雅一（京都大学）主催シンポジウム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高田 大志 (Takada Daishi)		
研究協力者	佐野 俊也 (Sano Shunya)		